

「う…♡、うう……っ、あ…っ♡、も…、もう挿入^{はい}らな…、」

^{だいたい}橙色の舞台照明のもと——金属の首輪をした全裸の少年が、淫猥^{いんわい}に身をくねらせていた。

少年は両手を後ろの床につき、観客側を向いている。裸の尻を床につけたまま脚を大きく広げ、その中心を客人たちへ向けていた。

少年が身じろぎするたび、尻の下の敷板^{しまいた}がぎしぎしと音をたてた。その音が開けひろげにされている、自らの恥ずかしい場所を強調するうような気がして恥ずかしい。

「ああ……っ、♡♡」

少年の後孔に、また新たな木箸が挿し込まれる。

そこには既に十一本もの木箸が、観客たちによって挿し入れられていた——。

「さあー！どなた様も寄ってらっしゃい見てらっしゃい！^{さっこん} 昨今娯楽は数あれど、
^{こよい} 今宵は目玉の美少年！見世物小屋の見世物に、ミイラや珍獣^{ふる}もう旧い！都会の映画なんかより、うちの少年見て行って！！さあー入った入ったあ
っ！！！！」

小屋の外では法被姿の木戸番が大声で客引きをしている。

ここは規制のゆるい田舎町の一つで、堂々と商売をできるのも今のうちとばかり、道行く人々に声をかけてまわる。

「さあさ！ 殿方どうぞお入りください！ お代は見てのお帰りで結構！ おっかなくありません、入ればわかる面白さ！ さあー！ これから世にも珍しい、美少年の芸をご覧にいきます！」

近くの境内では、五穀豊穰祈願の春祭りが終わったばかりだ。

夏の気配を孕んだ夜風に吹かれ、神輿を担ぎ終えた男たちがぞろぞろとやってくる。

小屋は破風板と布とで覆われた簡素なもので、側面には蛇女や人間ポンプの絵看板がおどろおどろしげに立ち並んでいた。柱は丸太を地面にさしただけの、一日限りの小さな仮説小屋。興行社の名前はどこにもなく、彼らが一体どこから来たのか、人出の多い祭りの一体いつからここに小屋を立てていたのか、知る者は誰一人いない――。

「ああ……、♡」

少年は、苦しげに薄い腹を喘がせている。

舞台と客席との間には土間もなければ手摺りもない。

せせこましい小屋にぎゅうぎゅうに入ったお客の波が、舞台の淵にまで押し寄せてくる。お客は誰もかれも殿方ばかり。最前列に陣取る男たちの手に手に木箸が握られており、興奮した様子で次は自分の番だと各々言い張る。

「皆々様、どうぞおひとり様一回まで！一回限り、この至宝の少年をお犯してください！」

もう一人の木戸番——若い男が舞台上で声を張る。

もはや怒声のようになった、熱気を帯びた歓声が小屋じゅうにひしめいていた。閉鎖された非日常空間が彼らをそうさせるのか、はたまた舞台上の少年のあまりの美しさがそうさせるのか——。

少年の肌は照明の強い光を浴び、表面になまめかしい影を作る。若木のようにしなやかな肢体は、年相応の低い身長や幼い顔立ちに比し、いくらか婀娜めいた印象だ。首枷から伸びた長い鎖の先を木戸番に握られているさまも、ますます見る者の情欲を掻き立てる。

濡れたように黒く、しっとり重い髪。唾液に濡れた薄桃色の唇。

長い睫毛の縁取る大きな瞳は、遠目で見てもわかるほど左右で色が違っている。

しかしその珍しさよりは全体の美しさが勝って、少年を見る者は皆好奇心よりは深い劣情を抱くのが常であった。

「ほ～ら、まだまだ挿入^{はい}るだろお～？それ、もう一本っ」

「！あああ…っ♡♡♡、」

今しも客の男が新たな木箸を少年のなかに挿し入れてきた。

十二本目の木箸を挿入され、限界まで広げられた肉環がひくひくと疼く。入り口の襞^{ひだ}はすっかり広げきられ、ただの平面のようになりかけている。ふっくらと充血したそれはまるで椿^{つばき}のつぼみのようだ。箸の束を締め付けてしまうたび漏れ出る腸液に濡れ、ますます卑猥に色づいていく。

「…っ♡♡、いや…っ、♡いやあ……っ！もう押し込まないでえ……！」

少年は苦しさに涙を滲ませるが、

「そんなこと言いつつ、本当は好^よくて堪らないんだろお～??」

聞き入れられるどころかますます箸を奥へ押し込まれる。

「！♡、ああ…っ♡いやあ…っ、いやなの……っ！」

箸の先端は丸く削られており決して痛^けくはないのだが、内側を何本ものそれで

拡げられるたび、毎回少年は堪らない思いをする。

少年の後孔は、異物を挿入されればすぐさま淫猥な快樂を得るよう調教されている。親の借金の形にこの一座に買われたのが三か月前。それからというもの少年は毎晩、座長の^{ねや}閨に呼ばれている。芸らしい芸を叩き込まれるでもなく、ただひたすらに犯され続けた。はじめは痛いだけだったのが、七日も経つ頃にはすっかり淫猥な感覺を覚え、舞台上に上がられるようになった。

舞台上で少年に求められることは二つ。

一つは木戸番のタンカに合わせ進行する舞台から逃げず、言われるがままでいること。もう一つは、命じられた間合いで^{なにわぶし}浪花節を披露することだ。

これといった芸もなく教えられもしていない少年には、たまたま故郷の村で数曲手習いした浪花節だけがかろうじて身につけているのみだ。ただ興行側は少年を「美しさ」や「妖艶さ」で売ろうと^{もくろん}目論んでいるらしく、その浪花節の上手い下手が問題になることはほとんどないと言っていい。

「あああ…っ♡♡♡」

孔をみっちり十二本の箸で埋められて、少年は観衆へ突き出した腰をわなわなと震わせた。強制的に拡げられた肉洞が先程から何度もひくついて、腰の底からぞくぞくとした痺れが^{のぼ}這い上る。

「ご覧くださいこの孔の広がり！そしてなんということでしょう、^ふ触れられてもいないあらぬ場所が、見る間に見る間に硬くなる…！清楚な顔立ちをして、なんと淫乱な少年でしょうか……！」

木戸番のタンカに煽られて、男たちの歓声が一際大きく盛り上がる。

衆目が自らの恥ずかしい場所に集中し、さらにはそれを実況され——、少年は毎度のことながら、あまりの恥ずかしさに気が狂いそうになる。

いや、狂ってしまえたほうがどんなに楽かもわからない。と、そう思う程に少年の心は羞恥に追い詰められていた。

されど木戸番にも観客たちにも容赦はない。

「ああああ……っ、♡♡♡♡」

孔を拡張される苦しさ^に涙する少年に、また新たな木箸が挿し込まれる。

「ほ～ら、ほら。ぐりぐりしてやるぞ～？」

「んひい…いい♡！、♡！♡♡♡ああ…っ♡、いやあ……っ！！！」

既にみちみちと音がしそうなほど箸で埋められた孔。

そこをいたずらに刺激するように、十三本目を挿入される。箸の束のいちばん隅

——内側の肉壁を先端でつつかれる。何度も角度を変えられながら挿入^{いれ}られて、細腰がびくんびくんと跳ね上がる。

「んく…っ♡、あっ、♡♡ああ……っ、もうだめ…っ、もうだめえ……っ！♡」

「そう言いつつ逃げねえじゃねえか」

「内心じゃ気持ちよくて仕方ねえんだろ！？」

少年が床に尻をつけたまま逃げないのは、逃げれば後で仕置きをされてしまうからに他ならない。けれど男たちが言うように、実際少年は苦しみながらも快感を覚えている。それは事実だ。

「こんなにされてよがってるなんて、やっぱ見かけによらず淫乱だなあ？」

「う…っあ♡♡、あああああっっ、♡♡♡」

ず、と一息に奥まで押し込まれ、背が弓なりに^{しな}に撓る。

孔内が苦しくて堪らないのに、内壁が痙攣したように箸の束を締め付けてしまう。締め付けてしまうたび苦しさが増して、けれど腹の底から悩ましい疼きが湧き出しもして、すっかり少年を混乱させる。

「なんとなんと！今ので十三本目だっ！これは新記録ーッ！！皆さま拍手を
お願い致します！！」

わっと男たちが沸き、口笛や野次が方々から飛び交う。

「…あ……♡ああ……♡♡」

自重を支える両手がそろそろ痺れて仕方ないが、そんなことは問題ではない。
これ以上身じろげば、本当になかが壊れてしまいそうだ。それに躰の奥に切な
い疼きがわだかまっでいて、ふと気を抜くとそれが大きな刺激になり替わり、自
分を貫きそうな、そんな予感にも苛さいなまれる。

「さあ！どんどん続きを行きましょう！お次の方、箸をどうぞ！」

「！…っひ、……っ、♡♡」

これ以上は耐えられないと、少年は無意識にいやいやと首を振っていた。
もはや声をたてるのも刺激が孔に伝わってつらい。

「ふふ……、急に大人しくなったじゃねえか」

「こんなに見られながら勃^たちまうなんざ、子どものくせにませてやがる……」

左右色違いの目から、とめどなく涙が伝う。

泣いてしゃくり上げるとまたなかが苦しくなりそうで、少年は息を止めていた。

「ほら、十四本目だよ。美味そうに啜え込みな」

「……っっ、♡♡♡♡♡、♡」

苦しさと快感のために、まるで寒さに耐えるように震える下半身。

ぬちゅ、と湿った音がして、堅い木の棒が少年の肉環をまた一段拵げにかかる。

拷問のように拵げられた窄まりは、もはやあまりの刺激に感覚が失われつつある。

しかし肉洞の奥は何やら物足りなさを感じ、ずくんずくんと焦れるような疼きが増していく。

だめ——！

少年が心中で叫ぶのと同時間だった。

どくんっ、と箸を詰め込まれた肉の奥が大きく収^{しゅうれん}斂し、軀の芯が引き絞られるような刺激に襲われる。

「あああああ…っ♡♡♡♡♡♡♡♡」

がくっがくんっ…と腰を突き出しながら、少年は絶頂を極めていた。張り詰めていた幼茎から白蜜が噴き出し、客席の男たちに降りかかる。白蜜を浴びた男たちはますます沸き上がり、興奮した様子で下品な野次を飛ばしてくる。

「ああ…っ♡♡あああ……………っ♡♡♡」

腰が振れるたび箸の束を烈しく締め付けてしまって、何度も追い打ちのように快感が疾る。白蜜を吐き出し終えても腰のがくつきが収まらない。強い快樂の余韻を貪るように、もしくはこんなものではまだまだ足りないと訴えるように、腰ががくつき箸を締めつけてしまうのを止められない。

「皆さまご覧頂けましたでしょうか？！大勢に見られながらこの達き様！！なんといやらしい光景でしょうか！そしてそして……、少年を達かせたお客様には、なんと！この少年の孔を一回限り！味わう権利が与えられます！」

「い…っいやあああ……！！」

少年の叫びは、どっと沸く歓声に掻き消された。